



222号

2017 / 4 / 1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’
東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli-san.com/>
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp



成都の古刹・大慈寺の境内に置かれた「小和尚」 成都中心街・春熙路にあるこの寺は、3、4世紀頃に創建され、三蔵玄奘が受戒したほか、鎌倉の建長寺を開山した蘭溪道隆もここで出家したそうだ。春節の間、境内に置かれていた「小和尚」の像は子どもたちの関心と呼んでいた。
(四川省成都、2017年2月撮影)

撮影：越後雅子

‘わんりい’2017年4月号の目次は24ページにあります

コラムのタイトルが変わったのに、また有為楠君代の名前が出て来て、びっくりされたことでしょう。実は、北京の本屋さんで、児童向けの本を自分用に物色している時、大きな字の四字成語が並び、絵付きで成語の解説をした本が目につきました。手に取って、パラパラ捲って見ると、あまり馴染みのない成語が並んでいて、子供用なのにこんな難しいものを、とびっくりしました。更によく見ると、「有名小学校入学のための準備」と書いてあって、2度びっくりしました。

どうもこれは、昔、日本でも「論語の素読」などと言って、小さい子供に先ず暗記させ、歳が進むにつれて、内容を徐々に理解させる「寺子屋方式」ともいえる教え方があり、最近になって、その利点が再評価されるようになってきていますが、この本もその方式の教科書なのだろうと理解しました。

皆様にも、内容をお知らせしたくて、本の掲載順に四字成語をご紹介しますと思い立ちました。言葉の由来を説明する物語は、本に書いてあるまま訳してみます。以下が、タイトルの四字成語の説明文です。()内は、訳者が追加しました。

▶「毛遂自荐(毛遂自薦)」

戦国時代、秦が趙の国の都、邯鄲を攻撃してきました。趙は小国で弱いので、仕方なく(国王の弟の)平原君が楚の国へ援軍を送ってもらうよう頼みに行くことになりました。出発前に、平原君は学問にも武力にも優れた人たちを20名選んで一緒に連れて行くことにして、19人まで選びました。毛遂と言う人がいて、自分の才能に自信があり、この困難な任務に参加したいと自分自身を推薦しました。

楚の国に到着し、平原君は楚王と何日も話し合いましたが、楚王に援軍を送る決心をさせることは出来ませんでした。そこへ毛遂が進み出て、楚王に、以前楚の国が秦と戦って負けた時の口惜しさを思い出させ、又、趙が滅びてしまえば、秦はきっと楚の国の安全を脅かすに違いないと説明し、楚王を納得させました。

楚王は、毛遂の話に心を動かされ、援軍を出すことに合意し、趙の盟友になりました。

成語の説明は以上で、この後に例文として、「張さんは自分から毛遂自薦で(積極的に)体育委員を買って出て、クラスメートを纏めて、一所懸命に運動会前の練習の指揮を執った」と言う文が出ています。

ここに登場する平原君は、斉の孟嘗君、魏の信陵君、楚の春申君を合わせて、紀元前3世紀ごろに活躍した、戦国四君と呼ばれるうちの一人です。この4人は、それぞれの国の王族或いは重臣で、自国存続のために縦横に活躍し、四字成語にはよく登場します。

「戦国時代」だの、「秦・趙・楚」などの国名、「平原君」などの人名を、ここで初めて聞く子供たちも、様々な四字成語のお話を聞くうちにおなじみになって、知識として定着していくのでしょうか。それにしても、積極的に自分を売り込んで手柄を立てる話が、四字成語として教えられているとは、中国の方に積極的な方が多い一つの原因かしらと思ひ至りました。

さて、読者の皆様は、これが、小学校入学前の子供たちに聴かせるお話であるということをご想像されるでしょうか。今回はほんの手始めです。今後にご期待ください。



kě juǎn ér huái zhī
可 卷 而 懷 之
巻いて之を懐にすべし 〈衛霊公第十五〉うえだ あつ お
桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄

今回は「直」について考えてみましょう。孔子は次のように言っています。「人之生也，直。罔之生也，幸而免 (Rén zhī shēng yě, zhí. Wǎng zhī shēng yě, xìng ér miǎn)」(人の生きるや直なり。之を罔して生きるは、幸いにして免るるなり)〈雍也第六〉。人はまっすぐでなければ生きていけない。これを無視して生きていられるのは、たまたま運がよかったからに過ぎない、と。「罔」とは「無視する」ことです。「直」を正直と読み変えても通じます。

この論理の裏を返せば、現実には、人は正直でなくても生きていける余地がある、ということにもなります。しかしそれは、偶々そうになっているだけで、多くの人々が、それぞれの秩序の中で生きていくためには、やはり正直であることが必要だということです。

では、正直でありさえすれば生きて行かれるのかというと、必ずしもそうとは限りません。そこで孔子はまた次のようにも言っています。「直而无礼则绞 (Zhí ér wú lǐ, zé jiǎo)」直にして礼無ければ、則ち絞す〈泰伯第八〉。いくら正直であっても礼がなければ、その生き方は窮屈なものになってしまう、と。この場合の「礼」とは、社会通念を形にあらわしたものだ。人が社会生活を送る上で必要な約束事のことです。今風に言えばモラルとマナーとセレモニーが合わさったものとみることができます。法概念が確立していなかった当時においては、これこそが社会秩序を保つ唯一の規範でした。この規範を無視してまで、己に正直に生きようとすれば、それは息苦しくなるばかりです。規範の中で生きてこそ、正直さは保たれる、というわけです。

孔子は更に次のようにも言っています。「好直不好学，其蔽也绞 (Hào zhí bù hào xué, qí bì yě jiǎo)」直を好んで学を好まざれば、其の蔽や絞す〈陽貨第十七〉。好んで正直になろうとしても、学ぶことを好まなければ、その弊害は、やはり窮屈なものになってしまう。ここで言う「学」とは、先人の知恵から真摯に学ぶということです。学ぶことを忘れた独りよがりの正直さは自分を苦しめるだけです。

では、学びの基準となる社会規範が崩れた場合はどうなるのでしょうか。孔子はまさにそういう時代を生きた人でした。『論語』の中に蘧伯玉という人物が登場します。衛の国の大夫で、孔子が日頃から君子として評価していた人物です。ちなみに当時の衛は、孔子の祖国の魯と同様、君主が無能であったため社会秩序が大いに乱れ、さすがの孔子も去らざるを得なかった国です。孔子はこの人物のことを次のように評しています。

「君子哉！蘧伯玉。邦有道，则仕。邦无道，则可卷而怀之 (Jūn zǐ zāi! Jù bó yù. Bāng yǒu dào, zé shì. Bāng wú dào, zé kě juǎn ér huái zhī)」(君子なる哉。蘧伯玉。邦に道有れば、則ち仕う。邦に道無ければ、則ち巻いて之を懐にすべし)〈衛霊公第十五〉。実に見事な指導者だなあ、蘧伯玉という人は。国がまともなときは立派に仕え、国がどうしようもなくなると、正直のすべてを懐に巻き込んで、じっと耐えながら時期を待つこともできる、と。指導者たる者、ただ正直なだけでは任務を全うすることはできない。その正直を「巻いて懐にする」度量も、先人から学んだ智慧の賜物、ということでしょうか。

(わんりい「中国語で読む漢詩の会」講師)

8月29日となった。大連に来て6日目の朝である。今日は、鳳凰山登山である。

鳳凰山は、丹東市内から北に約60kmいったところにある山だ。丹東駅で合流する中国人の友人が、景色は素晴らしいし是非行ってみようと言うので山登りもいいなと思ってOKしたのである。高さも836mというから高尾山より少し高い山で手頃な山と、その時は思った。その鳳凰山であるが、友人が東北四大名山の一つであると教えてくれた。帰国した後ネットで調べると残る三山は次の通り。

①長白山2,691m(吉林省)、②千山708m(遼寧省・鞍山市)、③^{いふりよ}医巫閭山866m(遼寧省・錦州市)

このうち長白山は、大連で仕事をしていた時、社員旅行で頂上近くまでバスで行き10分くらい歩いたところにある、北朝鮮との国境になっている有名な火口湖で風景を楽しんだ。あとの二山はまだで今年(2017年)は千山を登ろうと思っている。

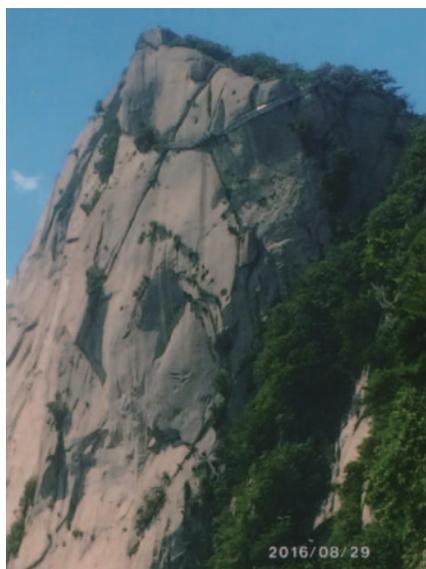
鳳凰山山頂まで29日のうちに登るので朝早くホテルを出て大連北駅に向かった。大連から丹東に行く交通手段は、ひと昔前までは高速道路は整備されていたので高速バスで4時間あまりかけて行っていた。私も2回利用したがさすがに疲れた。しかし数年前にいわゆる「和階号」という新幹線車両が走るようになっていた。ただハルピン行きは、「高鉄」といって300km超で走るが、丹東の路線は「動車」といって時速は200kmを超えない。

大連北駅に着き、窓口でパスポートを見せて6時54分の動車の切符を購入した。料金は108.5円で例によって端数がついている。券面を見るとD7741-4号車8Dとなっている。頭のDは「動」の中国語のピンインDòngから取っている。丹東到着予定時刻は9時35分である。つまり2時間41分の

所要時間である。このD7741号は丹東に着くまでに10駅も停まり、また最高時速も195kmなのでこれだけの時間を要したが、帰りの動車は停車駅も少なく、2時間20分であった。

さて、ほぼ定刻に丹東に着き、改札口で友人と無事合流できた。まず駅から近くにある「長城酒店」に私の荷物を置き、タクシーを探した。するとスッと車が近づいてどこまで行くのかと聞いてきた。日本

でいう白タクである。鳳凰山と友人が言うと150元だという。それならタクシーを探すと友人が言うと100円で交渉が成立した。車はほとんど信号のない道を北にすっ飛ばすように走る。途中8年前にゴルフをした時、ゴルフ場から見えた五龍山が見えてとても懐かしい。五つの険しい頂があるのでこの名がついたと思うが、印象的で美しい山である。現地には約1時間で着いた。100元支払って帰りも依頼したので100元は上客であるのだろ



岩壁の上部にガラスの回廊が設置されている

う。(大連は8元であったがいつのまにか10元になっていた)

鳳凰山の入口は、中国の観光地によくある必要以上の巨大な建造物があたりを睥睨するように建てられている。その建物の一部に入場券売り場があり一人80元支払う。これくらいはするだろうと中に入るとマイクロバスが留まっていて皆それに乗り込んでいく。ここで10元払う。マイクロに乗り5～6分走るとまた立派な門があり、その手前で下車する。ここから歩く人も若干いたが、殆どの観光客はそこに待機していたマイクロに乗り込む。また10元とられる。ようやく到着したところから山を登っていくのかと思ったら、そこからまたロープウエイに乗り換えることになっているのだ。やむなく50元支払ったが最初から150元にすればいいではないかと文

句を言いたくなかった。なにやら騙された気分になる。

ロープウエーは4人乗りで急いで乗るとサッと一気に上昇していく。眺めは確かに素晴らしい。到着したところは少し広がっていて売店がある。お昼頃になっていたのだからカップラーメンを買った。友人が手のひらにたくさんの突起のある軍手が必要だというのでそれも求める。あとでこの軍手が必要である理由が分かった。

登り始める。45度くらいの傾斜の階段が連続する。両側に金属製の手すりがありそれをしっかり掴みながら一歩一歩登る。たちまち高所恐怖症の私には下界が見られない。足元を見ながら脇見をしないように登るのだ。月曜日だということに人出の多いのに驚かされる。しかも若い人、子供、年寄り。このような山と分かっていたら来なかったのと言いたいが、老若男女楽しそうに登っているので弱音は吐けない。頂上近くになってガラス栈道(ガラス回廊)と書いた看板の所に来た。悪い予感がしてきた。大連に来る前に、確か8月20日ころ中国・湖南省にある世界遺産の張家界の大峡谷で世界で最も高い(300m)ところにあるガラスの吊り橋(430mの長さ)が完成し、すごい人気だとの写真ニュースを見ていたのである。

栈道の入口でガラス保護の為に靴の上から布製のカバーを履かされた。皆行くので私だけ行かないわけにはいかない。中国大陸は岩山が多いがここも岩また岩だ。おそろおそろ岩山沿いに歩く。何しろ足の下に千尋の谷が緑がかったガラス越しに見えるのである。友人はスタスタと平気で進んでいく。張家界の吊り橋といい、中国人はどうしてこのようなものが好きなのか!と思う。この山に来たことを後悔したがすでに遅い。幅は1.5m程度のガラス道が100m近く続いているのだ。下山道は頂上の向こうという。50mくらい進むと4畳程度の谷に突き出したスペースが作ってある。友人は



急傾斜の岩場を登る人々

早速そこに寝転がり、写真を撮ってくれという。やむなく数枚撮ってあげたがそのあと手すりから身を乗り出すようにして谷底を見始める。その姿を見ているだけで、彼が谷に落ちる様子を想像してこちらの身がすくむ。「蜀の栈道」はこのようなガラスのない栈道かもしれない。この栈道をなんとか通り過ぎたが、また手すりの付いた階段が続く。ツブツブの付いた軍手が活躍してくれる。遠くの景色を見る余裕が少し出てきたので遠くを眺めると、確かに素晴らしい

光景が広がっていた。やはり東北四大名山と言われるだけあるなと思った。しかし二度とこの山に登るつもりはない。

頂上は狭いのですぐ下山することにした。ロープウェイとは別の道をゆっくりと降りて行った。バス乗り場に来たが10元、10元ととられるのも業腹なので二人で結局ふもとまで降りた。途中大きな池や滝、そして孔雀のそばで写真撮影できる休憩所もあって歩いて降りるのもまた楽しかった。高所恐怖症でない方はこの山はお勧めである。

出口には来るとき乗った白タクが待っていてそれに乗り込んで市内に戻った。一言付言すると翌日友人は筋肉痛とやらで、待ち合わせ時間に30分も遅れてきたが、私の足はまったく異常なしであった。なお、私は9月2日に帰国したのであるが、3日のニュースで前述の張家界のガラスの吊り橋が、オープンしてちょうど2週間後の2日に閉鎖されたことが報道された。CNNによると一日あたり8千人と設計されていたそうであるが実際はその10倍に膨れ上がっていたという。橋の入口で入場制限すればよさそうなものと考えるが、そうもいかなかったのかあるいは橋の設計はイスラエルの会社というが構造上の問題が出てきたのかはわからない。今はどうなっているのであろうか。

次号は丹東市内の有名な観光地についてふれたい。

(続く)

▶ テルの死を日本に伝えた由比忠之進

長谷川テルは中国の東北、佳木斯(ジャムス)で、1947年に亡くなりました。しかし、テルが死んだということは日本のエスペラント仲間では誰も知る人はいませんでした。中国では、共産党と国民党との熾烈な戦い、いわゆる国共内戦が勃発し、日本国内では、敗戦後の焼け跡闇市の時代です。

テルの死を日本の仲間に知らせたのは当時、“満洲”にいた由比忠之進というエスペランティストでした。由比忠之進という名前を聞いて、すぐに思い出す人はもう少ないでしょう。しかし、70歳以上の人たちで、ベトナム戦争に関心があった人なら、憶えている人がいるかもしれません。

▶ 世界に広がったベトナム戦争反対の声

1960年代半ば、アメリカは社会主義の北ベトナム、正式にはベトナム民主共和国に対してナパーム弾などの最新兵器を使い、また大量の兵士を動員して攻撃していました。当時、ベトナムは南北に分かれており、南はアメリカの傀儡政権でした。北は革命家であるホー・チミンが率いる国で、南にはベトナム解放戦線が活躍していました。

大国アメリカがアジアの小国ベトナムを激しく爆撃していたベトナム戦争は大きな影響を世界に与えていました。心ある人たち、とりわけ正義感の強い世界の多くの若者たちは、ベトナム戦争を止めさせるためにデモ行進などをして反戦活動を展開していました。日本では今は亡き小田実を先頭に、鶴見俊輔らの知識人たちによって「ベトナムに平和を！ 市民連合」(略称：ベ平連)が結成され、反戦活動が果敢に展開されました。日本だけではなく、ベトナム反戦活動はヨーロッパからアメリカまで全世界的な広がりをもっていました。

私は1968年夏、ブルガリアのソフィアで開かれた世界青年平和友好祭に、今は亡き伊東三郎(岩波新書刊『エスペラントの父 ザメンホフ』の著者)の誘いに乗って、訪欧の途次ということで参加しましたが、その大会に参加していた西ドイツの新左翼グループ、社会主義ドイツ学生連盟(SDS)の青年たちは、ルディ・ドゥチュケを指導者として仰ぎ、アメリカへの抗議集会で、「ホー・チミン！ ホー・チミン！」と、闘うベトナムの指導者の名前をシュプレーヒコールし、アメリカ政府への抗議の声を挙げました。そんな若者たちと知り合ったことも昨日のように思い出されます。まさに、目の当たりに、ヨーロッパの若者たちのベトナム戦争反対運動の熱気を知りました。

また、キューバ革命を指導したチェ・ゲバラは「第二第三のベトナムを創れ」と、ベトナム戦争を契機に世界革命の展望を望み、世界の若者たちに強いアピールを発信していました。

▶ 官邸前で焼身自殺して抗議

しかし、日本の当時の佐藤栄作政権は、アメリカ政府に追随し、沖縄を始めとするアメリカの軍事基地はベトナムへ出撃する米軍を背後から支えていました。多くの市民の反対にもかかわらず、枯葉剤などを投入してベトナムを攻撃するアメリカ政府を支持する佐藤首相は1967年11月12日、訪米しようとしていました。

その前日の11日、佐藤首相への政治姿勢に抗議するために、首相官邸前で焼身自殺をしたのが由比忠之進だったのです。

その頃、ベトナムでは仏教徒である僧侶の何人がアメリカに追随する南ベトナム政権とアメリカ政府に抗議するために、焼身自殺をしたことがありました。当時の南ベトナム政府の大統領夫人は、「人間バーベキュー」と言って焼身自殺を揶揄しました。

混迷の時代を拓くザメンホフの人類主義「私は人類の一員だ！」
第十二回 焼身自殺で佐藤栄作政権に抗議した由比忠之進
ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓(おおるい よしひろ)

由比忠之進が焼身自殺をしたことに日本の人々は驚き、マスコミでも大きく報道されました。由比は、佐藤首相への抗議の遺書をもっていました。

「私ごとき一介の庶民が何を訴えたとして何の効果も期待できないことは百も承知でいながら、も早がまんでできなくなった」

と焼身自殺する気持ちを記しています。朝日新聞は、「どこへ、だれに訴えていいかわからないで、悩みぬいた末の覚悟の行動」と由比の行動を報じました。

▶ 若い頃からエスperantoを学ぶ

由比は1894(明治27)年、福岡県前原(現在の糸島市)で生まれ、忠之進と名付けられました。父親が「国に忠義を尽くす人になるように」という思いがあったのでしょう。生まれた年は、日清戦争(中国では甲午戦争という)が始まった年でした。由比はしかし、父の期待に背を向けて夜逃げのようにして上京し、苦勞しながら東京高等工業学校、当時、蔵前高等工業と呼ばれていた学校に入学しました。現在の東京工業大学の前身です。

時代は大正デモクラシーの高揚期です。エスperantoも盛んに学ばれていた時代でした。由比は、新しい思潮の一つであったエスperantoを学び、平和と人類愛の思想に共感しました。

学校を卒業後由比は木工場を経営しますが失敗し、どん底の生活を味わいますが、親戚の紹介で名古屋中央放送局、現在のNHK名古屋放送局に電気技師として就職し、まもなく、“満洲”の紡績会社に乞われて電気技師として中国東北に渡りました。平和を愛し、人類愛に目覚めているエスperantonティストの由比忠之進は、五族協和と表向き言いながら、現実に満洲で目にした日本人の横暴さ、中国人に対する差別に対して会社に待遇改善を求め、技術者の中では最も進歩的でした。しかし、それが逆に会社に疎んじられ、電気技師とは関係のない北満の農業経営に左遷されました。

▶ 日本敗戦後、中国残留を望む

日本の敗戦は、日本人と中国人の関係を逆転させました。多くの日本人は相次いで中国を引揚げ、日本に帰国しました。しかし由比は、日本人が犯してきた罪

の一部分でも償うことができればと思っていました。

当時、大連にいた残留日本人たちのリーダーだった石堂清倫は『わが異端の昭和史』で「(由比は)中国の新しい経済建設に参加することは日本人の歴史的任務であるから、妻子は一足さきに帰国させ、単身北満に出かけると言いだした。骨はそこに埋める覚悟であった。彼の意気は大いに壮とするが、夫人とともに出かけなさい。それができなければ大連に残るように勧めたけれども振りきるように北へ行った」と記しています。

由比は破壊された紡績工場を再建すべく、家族たちを日本に帰国させ、自分ひとりが中国に残ることを決めました。

中国に残った由比は、いつも胸のところに緑のバッジをつけていました。そのバッジはエスperantonティストであることを示すものでした。このバッジをつけていれば、いつか中国人エスperantonティストに出会うことがあるだろうと思っていたのです。

1947年2月、由比は紡績管理局の敷地調査でハルピン、牡丹江、佳木斯などを回っていました。そして牡丹江の紡績工場で休んでいる時、デスクの上にエスperantoの本を広げて読んでいたところ、ある中国人が「あなたはエスperantonティストですか」と日本語で声をかけ、「長谷川照子を知っていますか」と訊いてきました。由比は、照子ことテルの存在を知りませんでした。

由比は仕事の関係で満鉄調査部にいた石堂清倫らとも付き合いがありましたが、石堂からもテルの名前を聞いたことがなかったようです。石堂は東大の新人会出身でエスperanto運動にも参加しており、テルの反戦放送も当然知っていたはずですが、仕事上、誰にもそのことを話さなかったのでしょうか。

由比に声をかけてきた中国人とは、テルの夫の弟である劉介庸でした。

(本稿は比嘉康文著『我が身は炎となりて一佐藤首相に焼身抗議した由比忠之進とその時代』新星出版刊、石堂清倫著『わが異端の昭和史』勁草書房刊を参考にしました)

東西文明の比較 (13)

陽光新聞社・顧問

塩澤宏宣

今から約1万5千年前、北と南から来た「祖先」が日本列島で巡り逢い縄文時代が始まりました。1万年以上続いた縄文時代は平等であり、平和でした。「史記」によれば、そのような平和な列島に秦の始皇帝によって派遣されたとされる徐福の一行(男女3000人余)が移り住み、彼らが「稲作・青銅器・鉄器」などを中国から持ち込んだことが想定されます。

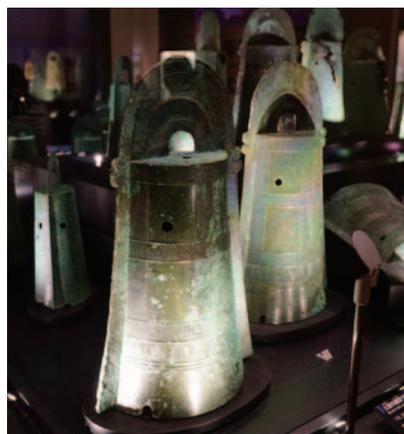
おりしも中国では、粟や麦の畑作を中心とする北の文明と、米を中心とする南の文明が衝突する「春秋戦国時代(紀元前8世紀～同3世紀)」でした。その長い争いに敗れた南

の文明の人々が、難民となって四方に拡散したと伝えられています。それら難民の一部も、日本列島へたどり着いたと考えられます。彼ら渡来人は、縄文人の作った「漁労・狩猟・採集」を中心とする縄文文化に区切りをつけました。弥生文化の誕生です。以後の時代区分(一般的)は、めまぐるしく変化します。

- ▲弥生時代(紀元前数世紀～紀元3世紀中頃)
- ▲古墳時代(3世紀中頃～7世紀)
- ▲飛鳥時代(592年～710年)
- ▲奈良時代(710年～794年)
- ▲平安時代(794年～1184年)



登呂遺跡の復元高床式倉庫 (画像はGoogle Panoramio) 加茂岩倉遺跡から出土した銅鐸



(ウィキペディアより)

……というように。

稲作・鉄器の伝来は、集団間による戦いの始まり

鉄器の登場で石器は駆逐されました。初期の鉄器は、木製の農機具を作るための加工具でしたが、その後には「鉄製の武器」へと変化しました。前回の記事で徐福伝説では「徐福は、稲など五穀の種と百工をもたせた」と述べましたが、その百工のなかに製鉄技術者や武器の製造者がいたことは間違いないのでは。

また、渡来の人々は春秋戦国時代を過ごしてきたということが考えられます。つまり、争うことを知っていたということです。「勝者は潤い、敗者は死か逃亡」という争いから逃れてきた民です。争いごとを知る民と鉄器(武器)。平和な生活しか知らない縄文人は、渡来人を前にして、大混乱したことは容易に想像できます。

権力者の誕生と、その支配

「稲作の始まりは、集団間による戦いの始まりである」と言われます。縄文時代では、竪穴住居がいくつか集まって“ムラ”をかたちづくっていました。しかし、厳密な共同体ではありません。それが、農業共同体の時代になると、土地を支配・管理するリーダー(首長)が必要になります。また、米は貯蔵が出来るので、豊作者が富むという格差が生まれます。ここに私有財産という観念が生まれます。更に、富者は鉄器(農機具・武器)を所有し、その他の農民の上に立つようになりました。縄文時代にはいなかった「権力者」が誕生したのです。

弥生時代の登呂遺跡^注

弥生時代の水田址は全国で20カ所以上発見され

ています。なかでも有名なのが、静岡県の登呂遺跡です。遺跡は住居址、水田址、森林址の三つの部分からなっています。登呂遺跡には12戸の竪穴住居址と2戸の高床式倉庫址があります。水田

址は住居に隣接する沼地にあり、総面積は約7万平方メートル、杭や板で畦をつくり、約40の田んぼに区切られています。

この登呂“ムラ”は、弥生時代後期(紀元100～200年)に存在しました。住民は60人ぐらいでしょう。遺品は、木鋤・田下駄・田舟・堅杵などの木製品です。この時代の稲刈りは、現代とは異なり、石包丁で「穂摘み」をしていました。そして「穂摘み」は女性の仕事でした。縄文の頃、女性は、木の実拾いやユリの根掘りなどの「採集」をやっていましたが「採集」が「穂積」になったのでしょうか。そのかわりに「漁労・狩猟」は男性の仕事でした。

高床式倉庫は、富める人の象徴

米は、漁労・狩猟の捕獲物に比べて貯蔵が容易です。「もてる者」と「もたざる者」の差がでます。高床式倉庫の出現は、私的所有による階級社会誕生の第一歩となったと考えられます。

銅剣・銅鉞・銅鐸は、なにを語るのか

弥生時代には、鉄器とともに青銅器も伝播されました。かつては、銅剣は中国地方の文化圏、銅鉞は九州・四国地方の文化圏、銅鐸は近畿・東海地方の文化圏といわれてきました。しかし、1984年から翌年にかけて新たな発見がありました。

島根県簸川郡斐川町の荒神谷遺跡から358本の銅剣と6個の銅鐸と16本の銅鉞が出土しました。更に近隣の加茂岩倉遺跡からも39個の銅鐸が見つかりました。3種の青銅器が併存していたことが分かりました。次に銅剣・銅鉞・銅鐸について触れてみます。

銅剣：銅剣は中国・四国地方などに分布。儀式などで使用されるにつれ大型化したものと考えられ、形も徐々に変化しました。現在では、作成時期により3種類に分けています。初期は「細形」、中期が「中細形」、後期が「平形」と分類されています。滋賀県の上御殿遺跡で出土した双環柄頭短剣は、中国華北や内モンゴルに分布するオールドス式銅剣に似ており、朝鮮半島から出土していないことから、中国から日本海ルートで流入した可能性があります。

銅鉞：銅矛ともいいます。日本には朝鮮半島から入ったと思われます。弥生時代中期頃から九州のみ

で生産されていました。その後、銅剣や銅戈などのようにしだいに大型化し、祭器化します。型式は、年代的に細形から中細形・中広形・広形の順で変化しました。

- ①狭鋒細形銅鉞
- ②狭鋒中細形銅鉞
- ③狭鋒中広形銅鉞
- ④狭鋒広形銅鉞

銅鐸の役割：「鐸」とは、古代中国の柄付きの青銅製の楽器を言います。上部が開口しており、下側の柄を持ち、もう一報の手に持った棒で鐸を打ち鳴らしました。年代に応じて、形や大きさに変化が見られます。

- ①最古段階の鐸：菱環鈕式りょうかんちゅうしき
- ②古段階の鐸：外縁付鈕式がいえんつきちゅうしき
- ③中段階の鐸：扁平鈕式へんぺいちゅうしき
- ④新段階の鐸：突線鈕式とつせんちゅうしき

古い段階の鐸は、摩耗状態から実際につるして鳴らされたようですが、新しい段階の鐸は大きくて鳴らす楽器としては使うことが出来なかったと思われる。「聞く銅鐸」から「見る銅鐸」に変化したようです。銅鐸は、集落を離れた奇怪な場所から発掘されます。そのことから「見る銅鐸」の裏側(使用目的)が考えられます。

まず、銅鐸は祭りに使用され、終わった後、山中に埋めた。翌年掘り起こして使用後、また埋める。それを繰り返したが、その風習がなくなり忘れられた、という考えがあります。

次の意見は、やはり祭りに使われたが、用済みの祭器として山中に埋め納めた。三つ目の意見は、銅鐸は地霊・穀霊の依代(神が宿るモノ)だというもの。大地に埋めて神霊を鎮め、掘り出して地上で祀るという考えがあります。私は、最後の意見?に賛成ですが、いかがなものでしょうか。

今回は“ムラ”から“クニ”の誕生について、書いてみたいと思います。

注) **登呂遺跡**：静岡県にある、弥生時代の集落・水田遺跡。国の特別史跡に指定されている。弥生時代後期に属し、1世紀ごろの集落と推定される。

(ウィキペディアより)

今日の漢詩の会では、漢詩の創作法についてご講義いただきました。

漢詩、と言っても古体詩と近体詩の二つに大きく分かれます。近体詩は今から1300年程前の唐代初期に確立した作詩法で、それより以前の比較的自由的なスタイルで作られた詩を古体詩(古詩)といいます。1300年前の日本といえば、奈良時代で、万葉集が編纂されたころに当たります。文学の歴史だけ見ても約3000年、日本の倍以上の歴史を持つ中国にとっては、唐の時代は必ずしも古いとは言えないようですね。

近体詩は唐の時代の音を基礎にして作られた決まりですが、現代中国語の標準音ではすでに失われている音があります。唐の時代に一体どんな音で漢詩が詠まれていたかは、今の普通話話す中国の一般の人々にとっては、想像すらできません。一方、福建語や広東語等、南方音には唐の時代に近い音が残り、普通話で判別不能となっている韻の識別が全く不可能ではありません。

現在の中国では、標準音の韻を新韻、唐の時代の音を旧韻(平水韻)と呼び、新韻を基にして作詩しようという新韻派と、従来の方法での作詩に拘る旧韻派との対立があり、最近のネット上では両派が共存しているようです。

話は変わりますが、私も何十年も前に中国で、新しく想定された唐代音で詠んだという漢詩の音源を耳にしたことがあります。意味は分からないものの、聴いた感じは広東語みたいな響きだったように思います。大変新鮮で、今でもハッキリ記憶に残っています。

では、日本人の私達が漢詩を作詩することは果たして可能なのか?と言いますと、実は可能なのです。日本にも多くの漢詩の作者がいました。平安時代では菅原道真が突出していますが、多くの貴族たちが漢詩を作りました。遣唐使の影響もあり、当時の文人貴族たちの間には中国語を話す人たちが数多くいたと推定されますが、江戸時代の頼山陽、明治時代の夏目漱石など中国語は話せなくても、素晴らしい作品を残した日本人が沢山います。江戸時代までの

教養ある日本人には漢詩の素養は必須だったようですね。この風潮は明治期まで続きました。今でも中国語を話せない漢詩創作愛好者が、相当数存在します。中には中国人が見てびっくりするようなハイレベルの作品も見られます。

さて本題に入ります。先ずは李白の『秋浦歌』を例にとり、近体詩の中の一つ、五言絶句の平仄の見分け方についてご報告しましょう。平仄という言葉はよく耳にしますが、実態は一体どんなものか。それを知る人も最近では少なくなりましたね。しかし今でも、普通の漢和辞典を引けば、平仄と押韻が分かるようになっています。

qiū dǔ gē 秋 浦 歌 作者: 李白

bái fà sān qiān zhàng, yuán chóu sì gè cháng. 白发三千丈, 缘愁似个长。

bù zhī míng jìng lǐ, hé chù dé qiū shuāng. 不知明镜里, 何处得秋霜。

*「秋浦」とは現在の安徽省南部池州市にある地名

取り敢えず原詩を見ながら平仄について観察してみましょう。平声とは平坦な音ということで、現代中国語の第一声と第二声がこれに当たります。したがって第一声と第二声は、おおむね平声とみなすことができます。

仄声は傾いた、ギクシャクした音という意味で、上声、去声、入声(入声)の三種類に分かれます。このうち、上声と去声は、現代中国語の第三声と第四声に当たります。したがって第三声と第四声は、おおむね仄声とみなすことができます。

ところが、古代音の仄声の中には入声という音があり、この音は、南方の方言に一部残るだけで、現代中国語の標準音からは消えています。そして現代中国語の第一声、二声、第三声、第四声すべての声調の中に紛れ込んでいるのです。したがって、現代中国語、及びそれに近い音で話す北方地域出身の大多数の中国人にとって、入声を識別するのはとても困難です。

しかしこの入声は、日本語の仮名表記が(〜)(〜

ツ)となるので、識別が比較的容易です。例えば、国(コク)活(カツ)白(ハク)得(トク)などです。また、現代日本人にはほとんど馴染がなくなりましたが、旧仮名遣いで「〜フ」となるものも入声です。例えば合(ガフ)法(ホフ)蝶(テフ)葉(エフ)などで、これらも漢和辞典や一部の国語辞典で調べられます。

したがって中国語の発音をかじっている日本人で、中国語と日本語の辞書が引ければ、あとは漢詩のルールに合わせて字を選ぶだけ、となります。同様の理由で、日本語の辞書を引ける中国人ならば、誰でも平仄を判別できるというわけです。

さて、今回学んだ近体詩の作法は、この平声(平坦な調子)と仄声(ギクシャクした調子)をバランス良く配置することによって、成り立っています。実際の音は、唐代以後徐々に変化し、近代以後は大きく変化しましたが、唐代にいったん確立した作詩法は、その後も変化することはありませんでした。だから後世の詩人たちは実際にはない音を基に作詩することになったのです。漢詩の作法の難しさはこの一点に尽きるといってよいでしょう。

次に、五言絶句のルールをまとめてみました。平仄配置、押韻の法則、起承転結の法則、です。講座では七言絶句も取り上げられましたが、話を簡単にするため、今回のご報告では五言絶句に限ることにします。

平声は○、仄声は●で表示します。

■平仄配置

近体詩には平仄配置に一定の決まりがあります。五言絶句では次のようになっています。

1. 二・四不同(二字目と四字目は互いに平仄を異にする)

×○×●×、または×●×○×

2. 反法(起句と承句とでは、二字目・四字目の平仄を逆にする。承句と結句とでも同様に、平仄を逆にする)

起句 ×●×○× または 起句 ×○×●×

承句 ×○×●× 承句 ×●×○×

結句 ×●×○× 結句 ×○×●×

3. 粘法(承句と転句とでは、二字目・四字目の平仄を同じにする)

承句 ×○×●× または 承句 ×●×○×

転句 ×○×●× 転句 ×●×○×

4. 忌孤平(平声が仄声に挟まれる形 ●○●を嫌う)
5. 避下三連(下の三字に同じ平声または仄声が続くのを避ける)

以上、原詩がこの法則に合っているかどうか確かめてみてください。

■押韻の法則

押韻にも一定の決まりがあります。押韻というのは、日本語の詩歌では難しいですね。日本語は母音も子音も単調すぎて、一つの音節だけで韻を踏んでも音楽的効果に乏しいからでしょうか。漢詩の韻の種類は106もあるそうで、昔の日本の漢詩人は韻書(音韻の一覧表)をいつも手元に置いていたそうです。106の韻にはそれぞれ名称がついていて、東韻、陽韻、蕭韻、仄韻などと呼ばれています。漢和辞典で確かめることも可能です。中国国内でも最近では韻の種類を調べる小冊子が出版されているようです。ネット上でも韻を検索することができます。興味のある方は「平水韻表」で検索してみてください。カナ変換でも出てきます。

五言絶句の押韻の法則は次のようになっています。

1. 五言絶句の場合は通常、承句、結句の二か所で押韻する(正格)
2. 起句、承句、結句の三か所で押韻することもある(変格)
3. 転句の末尾では押韻しない。その場合、韻を踏んだ字とは平仄を逆にする。例えば平声で押韻したとき、転句の末尾は仄声にする。仄声で押韻したときは、その逆。

以上、これも原詩で確かめてみてください

■起承転結の法則

1. 起句=出だし。注意を引き付ける(ナニナニ…?)
2. 承句=自然な形で起句を受け、次へとつなぐ(フンフン、ソレデ…)
3. 転句=視点、発想に変化を付ける。(エエッ! ナニ? コレ)
4. 結句=全体をまとめる(ナルホド! 了解!)

これを原詩に当てはめてみましょう。

白髪三千丈(ナニナニ…?)

愁いに縁りて箇くの似く長し(フンフン、ソレデ…)

知らず明鏡の裏(ナニ? コレ)

何れの処にか秋霜^{そう}を得たる(ナルホド、了解)

—苦勞続きで、いつの間にか老いてしまった自分の姿を鏡に映して嘆いているんだなあ。この詩人は……。

日本語にすっかり浸透している「起承転結」という言葉が絶句のルールによって生まれた言葉と知ってびっくりしました。植田先生曰く

「これはサザエさんの4コマ漫画と全く同じ。是非サザエさんの漫画を見てください。今の4コマ漫画は起承転結がないからチンプンカンプンだけどねえ。西

洋のシンフォニーも大体4楽章に分かれていて、ちなみにベートーベンの『第九』を例にとると、第1楽章では重々しく静かに印象深く、第2楽章では前楽章を受けてやや高揚感をはらみ、第3楽章でガラリと雰囲気が変わる…。最後の第4楽章では、前の三つの楽章を受けて最大限に盛り上げる……みたいになっている。どうも起承転結の美学には洋の東西を問わず共通のものがあるかも。中国の漢詩、西洋のシンフォニー、日本の4コマ漫画、みんな起承転結だねえ。」

なる程、そう言えばそうだなあ、と、一同納得で頷きました。

中国の笑い話 31 (「365夜笑話」より)

翻訳：有為楠君代

第98話：金貨は溶解してなくなるか？

科学の時間に、先生は一枚の金貨を取り出し、シャーレの中の液体を指しながら言った。

先生：「さっき、この液体の性質を話したね。今、この液体の中に、金貨を入れたら溶けるか、考えてごらん。誰か分かる人は？」

子供たちは、顔を見合わせて、誰も答えられないでいた。すると一番前に座っていた生徒が手を挙げて答えた。

生徒「絶対解けません！」

先生「今日の勉強が一番よく分かったのは君だね！」

生徒「勉強は分かりませんでした」

先生「じゃ、どうして金貨が解けないと分かったの？」

生徒「金貨が解ける液体に、先生は金貨を絶対に入れません！」

第99話：人類に最も近い動物

先生は、ダーウィンの進化論を講義したが、時間が何分か残ったので、生徒に質問をした。

先生「人類に最も近い動物は何だね？」

講義中居眠りをしていた生徒が、目を覚まして答えた。生徒「ハイ！ 虱^{しらみ}です！」

第100話：お父さんもそうだ！

生物の先生が生徒に話した。

先生「ニワトリ・カモ・ガチョウ・トビなどは、
歯が退化してしまっているが、丈夫



な胃があるので、彼らはものを食べるのが非常に速い」

そして生徒に質問をした。

先生「他にこのような動物の例を挙げることが出来るかね？」

ひとりの生徒が大声で答えた。

生徒「僕の父です！」

第101話：母鳥の年齢

小学校の先生が子供たちに尋ねた。

先生「明明、めんどりの年齢はどうしたら分かるのかしら？」

明明「歯で分かります」

先生「でも、めんどりには歯がないのよ」

明明「先生、僕には歯がありますよ！ 食べてみて肉が柔らかかったら、そのめんどりの歳が若いんです。若し肉が硬かったら、そのめんどりはきっと歳をとっています」

第102話：ひげのある者

小さな弟が、猫とネズミを見つけた。弟が身をかがめてお辞儀をして「おじさん」と丁寧に呼びかけているのを見たお兄ちゃんが言った。

お兄ちゃん「馬鹿じゃないの！」

小さな弟「ママが言っていたよ。おひげを見たら、丁寧にしてお辞儀をして、おじさんと呼ぶんだよって。あの猫とネズミのひげはパパのひげよりもずっと長いよ！」

ウォルチュルサン
月出山は韓国南西部にある花崗岩の針峰が林立する山群の山である。また「海割れ」で有名になったチンド
珍島は、王朝時代に官僚が島流しにされたところで、さしずめ江戸時代の八丈島のような島だ。面積は八丈島の約6倍もあり、種子島と同じくらいで、韓国では3番目に大きい。

40年ほど前に当時のフランス大使がこの「海割れ」現象を見て「モーゼの奇跡」としてヨーロッパに紹介してから、人々に知られるようになったという。私はラジオで聞いて初めて知り興味をそそられ、海の上を歩いてみたくなった。

それは大昔から二つの潮流が激しくぶつかる所に、少しずつ砂利が堆積してきて、干潮のときに盛り上がった部分が現れて、道のようになる現象をいう。自然現象なので毎年同じ日というわけではない。おおよそ4月上旬から下旬ころという。島には半日ハイキングに手ごろな山も幾つかあるので、「海割れ」以外にも興味は尽きない。また島からさらに南の済州島に韓国で一番高い山・漢拏山ハルラサン (1,950m) がある。

1日目：成田から空路、仁川へ行き、空港から直通高速バスで木浦モッポへ行く。そこからタクシーで霊岩ヨンアムへ向かった。月出山の登山口にある簡素な民宿でオンドルが暖かい部屋に泊まった。月が煌々と輝き、岩壁が光っていた。

時差なしの外国へハイキングに～という案に、回を重ねた7名の女性でスムーズに山麓まで着いて、ワクワクしながら就寝した。

外洋に接している木浦は、王朝末期にいち早くキリスト教が伝わったところで、日本統治時代のトンネルや神社跡なども残っている。

2日目：朝食は山菜薬膳料理、そしてお弁当も用意して



有名な「雲の吊り橋」

もらって出発する。有名な雲の吊り橋（クルムタリ）まで約1時間、ゴツゴツとした岩山が眼前に広がってきた。日本では川の兩岸をつなぐのが橋というイメージがある。ここの橋は峰と峰とをつなぐつり橋である。以前は、スリル満点で揺れる足もとの板の隙間から、はるか120mも下の道に行く豆粒のような人影が見えたり、橋の中央で恐怖のため立ち往生している人も見かけた。改装された現在は、豆粒も見えないし安心だ。

このように山と山とを繋ぐ橋というのは韓国では、ほかの山にもある。山頂へは小刻みな登降をくり返していき、抜けるような青空のもと花崗岩の白い岩肌が光る。

やがて山頂・天皇峰チヨナンボン 809m。素晴らしい景色をおかずにみんなで早めのランチを広げる。平日なので数人に会っただけだが週末にはたくさんのハイ

カーでにぎわう。ここから南西へ岩稜の縦走路を進むが、整備されているのでロープは不要だが注意して進む。

下山したところにある道岬寺ドカフサは千年以上前に創建された古刹だ。そこで地元のAさんと言葉を交わした。



海割れするとき

多いそうで、はるか南方には済州島がある。アリの石碑のところへ下山して、昼食は名物の鴨料理に舌鼓をうった。そして王朝時代の著名な山水画家の屋敷だった雲林山房ウルリンサンパンのたくさんの絵画を見てまわった。広い庭

「どちらから? (オディソ オショツソヨ?)」
「日本からきました (イルボネソ ワッスムニダ)」
という具合だ。ひと汗流したい…と言ったら、バスに乗らずに自分の車で木浦の銭湯へ案内してくれた。今日は知人を案内してきた帰りなのだそうだ。御厚意に感謝して、ささやかな手土産を受け取ってもらって別れた。

一浴後、夕食はAさんに教えてもらった店で、特上の焼肉を賞味した。そしてタクシーに分乗して、観光課の瀧口さんに紹介してもらった珍島の宿へ行く。昔は船で渡ったというが、今は500mの珍島大橋を車に乗ったまま渡るだけなので、はるばる島へ来た～、という実感がわかなかった。瀧口恵子さんは山梨県出身で帰化して25年以上になり、珍島の文化観光課に勤務している。

3日目：「海割れ」のお祭は明日からで、今日は準備に忙しそうだ。朝、郡庁の観光課へ行って瀧口さんに資料の送付などのお礼を述べ手土産を渡した。今夕に「海割れ」を見に行くことにして、まず最高峰の尖察山チヨムチャルサンへ登ることにする。タクシーで雲林山房へいき、双溪寺の横から沢沿いの小道を登っていく。こじんまりしているが由緒ある寺で、智異山チリサン南面にあるのが総本山という。去年の秋に智異山で沢登りをした時、その双溪寺へ下って、境内が見事な黄金色のじゅうたん（銀杏の落葉）だったことを思い出した。林を抜けて、尾根に上がると涼風が心地よく、ゆっくりでも昼前には485mの山頂へ着いた。双溪寺から約1時間半くらいだ（東京の高尾山は599m）。

小さい山の大展望！ぐるりの海上には200以上の島々が浮かんでいる。多くは無人島で渡り鳥も

の一隅にある蓮池は映画のロケにも使われたところで、意外と小さな池だ。

ところで、旅と酒の歌を8千首余も残した歌人・若山牧水は、死の前年に珍島を訪れている。日本の統治下だった当時、朝鮮へ揮毫旅行に出掛けて珍島を訪ねた。最晩年の『朝鮮紀行』にはその珍しい風物が詠われている。

青春時代の佳作

〈幾山河越え去りゆかば寂しさの果てなむ国ぞ今日も旅ゆく〉や

〈白玉の歯にしみとおる秋の夜の酒は静かに飲むべかりけり〉

などは良く知られている～。こよなく酒を愛し、病床での絶筆も酒が欲しい…という歌だった。私は出発前に『朝鮮紀行』に目を通して、いっそう珍島への思いをかきたてられたのだった。牧水に無形文化財の珍島挽歌を捧げたい。

「山河の草木は若返り わが人生は暮れてゆく…あの世への険しい道を…だれがお供をしてくれようか…」

また大町桂月は牧水より前に明治～大正時代に多くの紀行文を残しているが、朝鮮半島へも足を延ばし、紀行文を残している。文語調で読むのがひと苦労だったが、秀吉軍勢の侵略にも触れている興味深い内容だ。書店では見つからず、図書館で探してもらって、やっと読むことができた。

その後、待望の海岸へ行く。本当に海が割れるように音もなく潮が引いていく…。まさに歌の通りだ。「海が割れるのよ、道ができるのよ、島と島とがつながるの…、こちら珍島からあちらモドリまで…」。歌のヒットで、日本からの観光客が増えてきたそうで、ツアーの一行も見かけた。



王朝時代の著名な山水画家の屋敷だった雲林山房

祭りのいわれは、「島には昔、トラがよく出没したので村人たちは対岸の島へ避難することにした。しかしポンおばあさんだけが逃げ遅れてしまい、みんなに会いたいと毎日神に祈っていた。すると夢に『明日海に虹を掛けるから渡りなさい…』という神のお告げがあり、村人たちがその道を渡ってきて無事再会できたが、おばあさんは力尽きて亡くなってしまった。その後二つの島の人々は『祈れば願いが叶う…』という「海割れ」のできる場所で互いに会って、毎年『豊漁』や『願いごとの成就』を祈りながら、ワカメなどを採って過ごす習慣ができた」という。

史実によれば、100年くらい前までトラが生息していて、2頭は捕まえて殺し、2頭は本土へ逃げた…というから、秀吉軍のころトラがいたのだろう。

私たちはレンタルの長靴を利用して海の上を歩くことにした。完全に水が引いていない所やヌルヌルのワカメが生えている所もあるので、転倒しないようにストックを使った。2.8kmにも渡ってできた海の道では、アサリやワカメ採りに余念のない人もたくさんいた。夕やみせまるころ再び海水が満ちてきて、もとの海に戻っていくのを見てから海岸に別れを告げた。ポンおばあさんの大きな石像がジーンと海を見ている…。

また400年以上前の秀吉のころに海上で戦死した豊臣水軍の遺体が珍島に流れ着き、島民が埋葬していたということで、21世紀になって新たな交流が始まっている。「敵の兵士を手厚く葬った住民に感謝」という記事が、日本のTVや新聞で紹介されて、

知られるようになったのだ。海で死体を発見したら収拾して丁寧に埋葬してやるのが海の掟、放置しておく船の後をついて来る…とも言われている。私は海上での戦いといえば、〈壇ノ浦〉の戦いを思いですが、一世を風靡したのちに滅ぶというのは、平家も秀吉も酷似しているように思う。

その後、木浦へ戻って海辺に近いホテルに移動、海鮮料理で最後の夜を満喫した。潮風に吹かれながら見た幻想的な海上の噴水ショーは、高く噴き上げられた水が音楽に合わせて優美にくねる姿が踊るようで、照明の美しさとあいまって、ため息の出るほど素晴らしかった。

4日目：朝食前に標高236mの儒達山^{ユダルさん}へ登る。小高い丘のような山頂の西に真新しい木浦大橋がよく見える。朝食後、海洋文化展示館へ行った。12～13世紀ころに難破した高麗の船から発掘された青磁の皿や日本の瀬戸陶磁器なども展示されていた。今日は先日の月出山のときに知り合ったあのAさんの案内である。数々の親切に感謝しつつバスターミナルで別れた。

〈ト マンナヨ! アンニョン ヒ ケセヨ (さようなら)〉。私たちは高速バスに乗り、満ち足りた気持ちでウトウトしていたら仁川空港に到着した。みんなのニコニコ顔が嬉しい。

〈山旅で命の洗たくいそいそと ゆるやかな古い老婆の休日〉

朝鮮半島の人々とは1500年以上も文物交流の歴史がある。だが、朝鮮通信使のことよりも、不幸な出来事というのは、なかなか忘れられないで、現在につながっている。だからいっそう、^{あめのもりほうしゅう}雨森芳州^注の尽力が光るのだと思う。

(2013年4月の「海割れ」に合わせて行く)
〈費用〉約五万円 (チケット+山行費)

▲掲載写真はいずれもGoogle Panoramioより

注)
雨森芳州 (1668～1755)：江戸時代中期の儒者。中国語、朝鮮語に通じ、対馬藩に仕えて李氏朝鮮との通好実務にも携わった。

スリランカはインドの南東に在り、インド洋に浮かぶ島である。

真珠の涙とか翡翠^{ひすい}のペンダントとか形容される程、心象^{しんしょう}は美しい。

面積は日本の北海道の8割に当たり、現在の人口は2000万人余である。スリランカ政府と「タミル・イーラム解放のトラ(LTTE)」による内戦が1983年から2009年にかけて続いたが、スリランカ政府軍がLTTE支配地域を制圧して26年にわたる内戦は終結した。この内戦後、急激にスリランカ観光に訪れる欧米人、ロシア人や中国人が多くなった。日本人も例外ではない。私自身、タランガッレ・ソーマシリ師とご縁をいただいて以来、仏跡のほとんどを巡拝した。然し、まだ知らない所が沢山ある。「マヒヤンガナ」だ行ってないのにと云われてしまった。マヒヤンガナとはパーリ語で「平ら」という意味である。仏陀が初めて訪れた場所である。キャンディの丘陵を車で走ると、壮大な自然風景が見える。マハウェリ川辺りには滅びゆく先住民ヴェッダ族が住み、仏陀が訪れたといわれるマヒヤンガナ寺院がある。マヒヤンガナの世俗から離れた森の暮らしの中に「足るを知る」仏教精神を垣間みると同時に人間としての生き方の何かを示唆してくれる。「ヴェッダ族」に伝わる物

語は、伝説と事実が混入しているかもしれないとお断りの上で、ソーマシリ師が語って下さったのは生きた旅案内である。

🌸「ヴェッダ族」の伝え語り

大昔、ヤクシャ(鬼)とナーガ(蛇)とデーワ(神)が住んでいた。その中で鬼が一番強かった。マヒヤンガナのマハーナーが苑で集会を開いていた或る日のことである。鬼が集会後に争いをするのを予知していた仏陀は、止めさせたいと苑内に座る場所をほしいと申し出た。鬼は仏陀の言葉を聞かなかった。仏陀は死者を出さないために空から飛んで来て、自分の体内から水を放ち苦しめた。更に熱い火の炎を放ったので鬼は降伏したという伝説がある。

仏陀はその時に「心の平和」に関する説法をされた。聴衆の中に神のリーダーことサマン神がいて、仏陀の説法を深く感動した。今後「その教えを敬う対象として、仏陀の何かをいただきたい」と申し出た。すると仏陀は自分の毛髪を抜きサマン神に与えられた。神は大切に持ち帰り黄金の壺に入れ、仏塔に安置した。その仏塔がマヒヤンガナ寺院であると云う。仏陀の存命中の紀元前528年1月の満月日に建立されたと伝えられている。

そう聞けばコロomboのケラニヤ寺院の壁画に、先住民に聖髪を贈る姿が描かれているのをみたことがある。マヒヤンガナは仏陀の歴史舞台となっているのであろうか？ スリランカの各地にも同様な壁画をみることができると云う。この伝え語りや事実のようなペラヘラ祭が8月に開催されている。キャンディやカタラガマに負けず劣らずの大規模な祭で、仏陀来島時の余韻が味わえるそうである。ヴェッダ族も加わる盛況なパレードはマヒヤンガナ、ペラヘラ祭のみで、独特の宗教儀礼となっている。



マヒヤンガナ寺院

(「グーグルPanoramioより」)



弓と矢を持ったヴェッダ(1890年当時)



首長。地域不詳(現代)

(2枚ともウィキペディアより)

する。さて、ヴェッダ族の近ごろの生活模様を話して下さったところに依ると、男性は腰巻き姿で肩に斧おのをかけた出で立ちが正装(フォーマル)である。大統領との接見も勿論、上半身は着衣なく対面されていると云う。女性はあまり見かけられない。家屋は客間の外に1部屋あるいは2部屋があり、土壁で仕切られている。屋根は椰子の葉を編んだもので原始的という何か? 全て自然重視で、

近年の「ヴェッダ族」の伝え語り

ヴェッダ族は、元から住んでいる人とか森の人とか称され「スリランカ人のルーツ」とされている。文字を持たず象形文字を持つ民族である。キャンディの街から1時間半位、車で、東方70km余の小さな町マヒヤンガナに人口2500人程度、更に20kmの場所ダンバナ村にヴェッダ族のボスと約100人の仲間が暮らしている。一か所に定住せず、弓矢や槍を用いる狩猟なりわいを業として農耕はしなかった。もとを辿れば、北インドから渡来したスリランカ建国の王(ヴィジャヤ王子)を父として、スリランカに住んでいた鬼族の女の間に生まれた子どもが祖先だと伝えられている。一般の書物では、北インドから最初のシンハラ人がスリランカに辿りついたのが紀元前5～6世紀だとある。他方、紀元前483年、北インド王の息子ヴィジャヤは蛮行のため死刑執行予定で船に乗せられたが、運良くタンバンニ(スリランカ島)に着いた。やがてアヌーラダブラを統治し、シンハラ族の王国を築いたと『マハーワンサ』^(注)に記されている。シンハラ人が移住する前は、スリランカは鬼(ヤクシャ)の棲む島として恐れられていた。鬼とはヴェッダ族を指していると思われる。従って時期的に一致

人間としてのルールを守り鹿肉、蜂蜜、象牙など採集し農作物と物々交換で生計をたてていた。

時代と共に国情が変わり、動物の殺生も禁じられた。マハヴェリ開拓プロジェクトにより、政府に土地を取り上げられて移転させられた。開発が進むとシンハラ人との結婚で、同化が進み、先住民として系譜は消え終わろうとしている。残るヴェッダ族は、自然の中でご先祖から継いできた暮らしの知恵を、そのまま生かしている。例えば、マッチを使わず火を起こす方法は実に上手である。私たちは物見遊山よろしくの態だが、逆にそれを嫌がらず、歓待するかのようである。森で採取した蜂蜜や動物の骨や歯で作ったネックレスや腕輪、インテリアなど小さなみやげものの出店が並んでいる。現金で購入したり販売することも見られるようになってきている。新しい観光エリアとして、業界から視線も向けられる日は近いと予感がする。日本で言えばアイヌ民族にも共通するヴェッダ族は、アイデンティティを失わず、誇りをもって生きていくに相違ない。

■注

マハーワンサ：スリランカの王についての物語をパーリ語で詠んだ叙事詩である。(ウィキペディア抜粋)

中国で一番美しい村・^{タンバ}丹巴訪問の旅 (写真による旅日記) ②

2016年2月5日～13日(参加8名)

■2月9日(木) 丹巴・巴旺 松安寺で巨大タンカ(仏画)のご開帳を見る

丹巴(県)は、四川省の行政区では甘孜藏族自治州(Gānzī Zàngzú Zìzhìzhōu)に属し、章谷と巴底の2つの鎮、それに13の郷があり、今回訪問したのは巴旺郷と呼ばれる辺りで、宿泊した民宿がある甲居村周辺の景色が「中国で一番美しい村」の評価を得ている。

以前、夏に訪れた時も深い谷に面した山の斜面、緑に埋もれるように白い建物が点在し実在の村ではないような美しさだった。今回は春の兆しが川べりの柳の梢をやっと色づかせ始めたばかりの季節だ。山の斜面に緑はないが、却って建物がくっきりと立体的に飛び出して見える。

民宿に入った夜、たまたま新婚らしい中国人のカップルが宿泊していた。私たちが屋根付き中庭で、焚き火を囲んで拙い中国語で「北国の春」を歌っていたら、中庭を通りかかったそのカップルの男性が「あれ!?!」という感じで、一緒に「北国の春」を歌い出した。その声が見事で、更に別バージョンの歌詞で「北国の春」を歌ってくれた。素晴らしい歌唱力で、全員聴き惚れた後はやんやの喝采だった。翌朝、民宿の屋上に上ると、彼が気持ちよく声を張り上げて歌を歌いながら写真撮影をしていた。

頭の上は日中の晴天を約束するピンクがかかった優しい青空が広々と広がり、深い谷から立ち上がる山の斜面に白い建物が朝日を浴びて点在している。この世のどこかに争いがある事など無縁のような平和そのものの人々の営みを感じさせ、歌う彼の気持ちがとても良く分かった。わたしも大きな声で歌いだしたくなるような「そこにいる幸せ」を心の底から味わった。

さて、今日は、巴旺郷の松安寺¹⁾が保管している大きなタンカ



御開帳準備中の松安寺の境内



生き仏様からハダ(祝福の布)を掛けて貰う



寺の屋根からタンカが下ろされる



カバーがはずされ眩いタンカが現れる



それぞれハダを持ってタンカの前に進み祈りを捧げる

(仏画)²⁾が開帳されるとのことで寺に向かう。寺はやっと法会の準備が始まったところで、私たちは金色に輝く寺の中を一巡りし、寺の門の脇の接待室に招じられた。お茶とお菓子の接待を受けると共に、ひとりひとり松安寺の生き仏さまより「ハダ」と呼ばれる歓迎と祝福の布を首に掛けて貰った。

やがて黄色い布に包まれた電信柱状のものが、寺の中から引きだされて寺の屋根からつり降ろされた。カバーの黄色い布がはずされると、チベット仏教ゲルク派開祖のツォンカバを真ん中に大きく描いた眩しいばかりのタンカが現れた。寺に集まった人々はそれぞれハダを手にしてタンカの前にしつらえられた祭壇の前に進み出ると、ハダを祭壇に備えて丁寧に祈った。私たちも彼等に交じって心を込めて祈った。今年はいいことがあると期待したい。

■2月10日(金) 晴 松安寺「チャムの踊り」を見る

昨夜、宿の夕食に出された野菜料理のあまりの美味しさに自分の年齢を忘れたのがいけなかった。夜中に目が覚めたら突然の嘔吐と共に下痢も始まった。食べたものは全部吐き出した筈なのに嘔吐は止まず、結局朝ごはんは、皆の健啖家振りを横目にお湯だけで済ませた。宿は掃除が行き届き、ベッドは大きくてゆったりしていて寝心地良い。トイレも清潔で水洗式だが和式風トイレなので高齢者にはキツイ。

今日は松安寺のお坊さんや選ばれた村人が奉納する仮面舞踏を見に行く。外国人は見学できない可能性があるとの連絡を頂いていたが、大川さんが複数の政府機関やお寺と折衝、参観依頼の文章なども工夫されたそうで私たちは観ることができるようになった。

ユニークな、そしてどこことなくユーモラスな仮面を付け、衣装を纏った動物や異界のもの達が入り替わり現れて松安寺の境内を跳んだりはねたりして踊り回った。物語があるようなないような感じで、大川さんの話では、基本的に平安(魔除け)と豊作を祈るものだそうだ。日本各地の神社で新年に奉納されるお神楽に近いものなのかもしれない。



▲「チャムの踊り」についての詳細は、キーワード「チャムの踊り」でネット検索してください。

■ 2月11日(土) 晴 松安寺で元宵節を楽しむ

昨夕、甲居の民宿から丹巴市内のホテルに移動した。朝、目が覚めて窓の外を見るとホテルの脇を流れている川向こうの山の斜面が真っ白だった。昨日は終日好天で青空が広がっていたが夜の間に降雪があったようだ。

11日は今年の春節・最後の日で、中国各地で元宵節の廟会が開催されている筈である。丹巴の元宵節は村々の人たちが寺にお参りし、踊って歌って楽しむ。松安寺の春節の行事が3日に亘って催されたが、11日の元宵節は人々が一番楽しみにしている行事だったのだろう。

丹巴の雪景色を暫し撮影し、松安寺に行く頃には、引きも切らず寺の参道を登って来る人たちが、山門脇にしつらえられた香炉に太い線香を供える(写真1)のでそのあたりは煙がもうもうと立ち込めていた。山門から寺の境内に入った場所に、寺の本尊である阿弥陀如来が安置された輿が僧侶に見守られて置かれ、此処も次から次へとお参りする人々であふれている(写真2)。

私たちが、本堂脇の建物で昼食をとって外に出ると、境内は、民族衣装を身にまとった人・人・人で溢れかえっていた。大川さんの甥の丹華さんが私たちの為の腰掛を用意くださっていて、踊りなど鑑賞しやすい位置に並べて下さった。各自が位置を決めて周りを見回すと、男たちはべろの付いた毛皮の帽子をかぶり、女性たちは老いも若きも、花模様などを縫い取った黒い布を頭に載せて赤や青の石の頭飾りで留め、幾重にもネックレスを付けた民族衣装の盛装である。巴旺は「美人谷」と言われる場所柄でどの女性も見とれるほど美しい(写真3)。

周辺の女性に見とれていると間もなく寺の中から四角い箱が次々に運び出され始めた。寺に納められていた108巻の經典で、この箱を頭に頂くと悪霊から身を守ることが出来るのだそうで、それぞれ經典の箱を持つ人が列になって進み、参拝の人たちは自ら進んで頭下げて触れて貰っていた(写真4)。



(11日の写真説明は文中)



5



6



7



8

ひとりひとりこの行事が済むと、いよいよ廟会の踊り・ゴージャン³⁾が始まる。

民族衣装を着、晴れがましい表情で既にスタンバイしていた踊り手たち(写真5)は、列を作って境内に現れると境内いっぱいになり輪になって嬉しそうに楽しそうに踊り始めた(写真6・7・8)。

踊りと踊りの合間には伸び伸びとした美声で歌う人たちがありで、青空から春の日差しが燦々と降り注ぐ寺の境内は、さながら踊りと歌の大演芸場に化した。廟会はこのまゝ夜まで続くのだろうか。私たちは翌日12日は早朝のバスで成都に戻るのだから丹巴での買い物予定があり廟会の会場を後にした。(終)

写真提供：越後雅子 / 河本義宣 / 神林直樹 / 為我井輝忠 / 早坂優子 文：田井光枝

※掲載写真のほか、参加の皆さんから寄せられた写真を‘わんりい’ホームページフォトギャラリーに掲載しました。

<http://wanli-san.com/pictur/ph-title.htm>

■注

1) **松安寺**：丹巴県チベット仏教のゲルク派(通称、黄教)の寺。1410年に大金川の川岸に建立、その後焼けて1635年に現在の場所に再建されました。ゲルク派開祖のツォンカバ(宋喀巴1357-1419)の高弟でギャロン出身のアワンザバ(阿旺札巴)が建てたと伝えられていて、丹巴では最も格が高い寺ですが、文革の折に殆ど破壊されました。1980年代頃から徐々に復旧され、近年は特に政府の援助が増えて建物の内外部共に復旧が進んで住民の願いが叶いつつあります。

2) **大きなタンカ(仏画)**：タンカのサイズは高さ12m、幅8mあります。タンカの中央に描かれているのはチベット仏教のゲルク派開祖のツォンカバで、農業暦の正月13日と、ツォンカバが降臨視察すると言われる10

月25日に開帳されます。

3) **ゴージャン**：ゴージャンダンスは踊りたい人が参加しますが、踊りのリーダーが決めます。また、それなりの衣装も必要です。踊りの衣装は、ギャロンの女性達がお祭りや結婚式等で使う晴れ着の一種です。伝統的なゴージャンダンスは楽器を使わずコーラスだけで踊ります。しかし、2000年代に入ってアレンジされたゴージャンダンスが流行りだし、その伴奏音楽には普通の西洋楽器が使われます。が、お坊さんが使う伝統的なドラやホルン等で効果音を入れる場合があります。尚、お坊さんたちの踊りの伴奏楽器は、太鼓、ドラ、トランペット、ホルン、ハンドベル、シンバルなどが使用されます。

(注は、全て大川健三氏より頂きました)

【東京中国文化センターの催し】〈中日国交正常化45周年記念〉 中国と日本の祭の共演を華麗にプロローグする水墨画

水墨画家・傅 益瑶 (フ・イヤオ) が描く中国・日本の祭絵展

無料

<http://www.ccctok.com/wp-content/uploads/2017/03/4abaaf11620616e42be3975dc244649a.pdf>

会場：東京中国文化センター 4月24日(月)～28日(金) 10:30～17:30(初日:15:00～)

●開幕式・レセプション 4月24日(月) 15:30～17:30

●トークショー 4月25日(火) 14:00～15:30「祭文化に魅せられて」 講師：傅 益瑶 画伯

※開幕式・レセプション/トークショーは申し込みが必要です。詳細：東京中国文化センターHPをご覧ください。

主催：中国文化センター・NPO法人 日本祭礼文化の会

問合せ：日本祭礼文化の会 ☎/FAX 03-3291-6996 担当：村田 ☎090-3341-7577

【傅 益瑶プロフィール】1947年 江蘇省南京市に中国近代画壇の巨匠・傅抱石の第五子として生まれる。南京師範大学(中国古典文学専攻)卒業。1980年 中国教育部派遣国費留学生として創価大学へ留学。武蔵野美術大学大学院修士課程で塩出英雄画伯につき日本画を学ぶ。又東京芸術大学で平山郁夫画伯に師事し仏教芸術の神髄を探究。社寺の障壁画制作を意欲的に行う。「倫雅美術奨励賞」「神道文化奨励賞」「祭文化普及功労賞」を受賞。昨年は中国政府から第5回「中華之光」賞を授与された。日本各地で「傅 益瑶が描く日本の祭展」が開催されると共に、NHK美術番組への出演や日本・中国各地で講演活動も枚挙にいとまがない。

【埼玉県山西省友好記念館 ^{しんいかん} 神怡館の催し】 <http://shenyi.jp/>

秩父地方で昔から作られてきた伝統工芸品・すかり・笹かご展

●場所：埼玉県山西省友好記念館・神怡館 ☎0494-79-1493

秩父郡小鹿野町両神薄2245 国民宿舎「両神荘」隣接

●4月8日(土)～5月28日(日) 9:00～17:00

*休館日 火曜日&5月1日(月)

●入館料：一般 200円/小中学生 120円

すかり：山に自生するイワスゲの葉を採取し、煮て、干し、針で裂き、より合わせて縄を作り、それを編んで作られる背負い袋のこと。採取から完成まで数か月かかる。**笹かご**：おかめ笹で作られるかごのこと。初めは緑色ですが、やがて色が変わり、水分が抜け、軽く丈夫なかごになる。おかめ笹はすぐ固くなる為、採取したその日の内に作り上げる。「すかり」も「笹かご」も一生もんと言われるほど丈夫だが作るのに手間がかかる事から現在ではあまり見る機会がなくなった。

100年前に作られたものも並ぶ⇒

笹かご

すかり



スマートフォンで撮る〈魅力の旅写真〉講座 1日で写真表現と画像処理方法の全てが分かる!

講師：佐藤 成範 (日本大学芸術学部写真学科卒業、日本中国写真芸術協会会長/(社)日本写真家協会会員)

三好 隆盛 (東京写真学園プロカメラマンコース卒業、日本中国写真芸術協会会員/豊島区国際アート・カルチャー特命大使)

●場所/株日中観光振興協会・飯田橋研修センター 東京都千代田区飯田橋4-1-11

●開催日時：4月8日(土)と4月29日(土) 10:00～20:00 (他日開講もあり <http://peatix.com/event/252057>)

◆講 義：10:00～15:00

◆撮影実習：15:00～17:00 都立庭園「小石川後楽園」

◆作品講評・画像処理&プリントアウト7⇒17:00～20:00 (写真の持ち帰り可)

●参加費：10,000円 ●定員：16人

●申 込：ryuisyo@gmail.com(三好隆盛) ☎03-6667-5918 日本中国観光振興協会(10:00～18:00)

※講座終了後、飯田橋駅付近で講師と受講者との懇親会(自由参加)を開催。会費：3000円

『わんりい』の原稿を募集しています

『わんりい』は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話などを気軽にお寄せ下さい。又『わんりい』の活動についてのご希望やご意見及び『わんりい』に掲載の記事などについても、簡単にご感想をお寄せいただければと存じます。

日中文化交流市民サークル『わんりい』

‘わんりい’中国語勉強会 (1992年5月開講25年間の実績あり)

講師：郁唯先生 (天津師範大学卒業)

和気藹々と楽しみながら中国語や中国の文化に親しんできました。程度としては中級クラス。10名～12名を定員としています。※入会金不要1か月間4回の体験無料です

- 会場：鶴川市民センター・和室 (〒195-0062 町田市大蔵町1981-4 駐車場有り)
- 日時：毎週火曜日 (原則として第5週目は休講) 19:00～21:00
- 会費：5000円 (教科書代を除く会場費、講師謝礼、‘わんりい’会費を含む)
- ◆問合せ：三澤 ☎042-735-2717 E-mail: fwjg1705@mb.infoweb.ne.jp

町田中国語勉強会 (毎月第1、第2、第4土曜日) 講師：郁唯先生 (天津師範大学卒業)
※どちらのクラスも入会金不要です。見学ご希望の方は気軽にお問い合わせください

午前クラス 10:15～12:15

- 会場：町田中央公民館 (原則として)
- 会費：3か月分として13,000円
- 対象：初心者の方も大歓迎
- ◆問合せ：☎042-725-3963 (森川)
E-mail: ymorikawan@ybb.ne.jp

午後クラス 14:00～16:00 [中国文芸サークル]

- 会場：町田市民文学館・ことばらんど
- 会費：4,000円/月
- 対象：中国語を少しだけ習った方歓迎
- ◆問合せ：☎090-1425-0472 (寺西)
E-mail: t_taizan@yahoo.co.jp

岡上中国語研究会新会員募集 講師：劉冠群先生 (北京出身)

北京出身の中国人先生から直接聞いて話して勉強してみませんか？
中国語初めての方大歓迎。見学也大歓迎！

- 会場：麻生市民館岡上分館 (〒215-0027 麻生区岡上286-1)
- 曜日と時間：毎週土曜日 10:00～12:00 ●会費：月謝5,000円
- ◆問合せ：☎044-865-3757 (久保田) E-mail: tizm2008@jcom.home.ne.jp (和泉)



初心者のための【鶴川水墨画教室】 体験のお誘い

- 講師：満柏 (日中水墨協会会長)
- 会場：鶴川市民センター (195-0062 町田市大蔵町1981-4 駐車場有り)
- 曜日と時間：第2又は第4月曜日 14:00～16:00
- 体験参加費：1000円 (見学無料/手ぶら参加可)
- ◆問合せ：☎042-735-6135 (野島)

◆わんりいの講座 **中国語で読む・漢詩の会**

漢詩で磨く中国語の発音！中国語のリズムで読んで漢詩の素晴らしさを味わおう！！

- ▲4月9日(日) まちだ中央公民館8F 第7学習室
- ▲5月7日(日) まちだ中央公民館6F 第3・4学習室
- ▲時間：10:00～11:30
- *録音機をお持ちの方はご持参下さい。
- ▲講師：植田渥雄先生 (現桜美林大学孔子学院講師)
- ▲定員：20名 (原則として)
- ▲会費：1500円 (会場使用料・講師謝礼など)
- ◆申込み：☎090-1425-0472 (寺西)
E-mail: ukiuki65@yahoo.co.jp (有為楠)



◆わんりいの講座 **ボイス・トレをして日本の歌を美しく！**

- 会場：まちだ中央公民館・視聴覚室
- ★動きやすい服装でご参加ください
- ▲10:00～11:30
- ▲4月25日(火)「花」作詞:武島羽衣/作曲:滝廉太郎
- ▲5月30日(火)「花のまわりで」
作詞:江間章子 作曲:大津三郎
- 講師：Emme (歌手)
- 会費：1500円 (会場使用料・講師謝礼など)
- 定員：15名 (原則として)
- ◆申込み：☎042-735-7187 (鈴木)
E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp (わんりい)



【わんりい・料理の会の催し】

穀物なのに糖質OFF、身体に嬉しい山西省の麵、健康雑穀・^{えんぱく}燕麦^注を味わおう!

講師：何媛媛(山西省太原出身) ※定員：先着15名(申し込み締め切り：4月13日)

燕麦はオーツ麦、カラス麦のことで、ヨーロッパや米国では昔からオートミールとして食べられている麦の一種です。内モンゴルや山西省などでは^{ヨウマイ}莜麦と呼ばれ、挽いて粉にして色々な麵料理として食しています。莜麦は良質な蛋白質を含み、ビタミンやミネラルが多い他に、食物繊維が豊富なことが分かり健康食品として見直されています。(えん麦の繊維含有量は、ソバとほぼ同じ、コムギの約五倍、米の約十倍です。)

今回は、莜麦を使った山西省の麵の中から、ちょっとユニークな、「^{イーイー}魚魚」と「^{ヨウミンカオラオラオ}莜麵栲栳」を取り上げます。

***中華風スープ、サラダ、デザートが付く他、手打ち日本蕎麦風も味わってみましょう。**

- 日時：2017年4月16日(日) 10:30～14:00
- 場所：麻生市民館・料理室
川崎市麻生区万福寺1-5-2/小田急線新百合ヶ丘駅北口徒歩3分
- 参加費：1500円
- 持物：エプロン、筆記用具、布巾
- 申込&問合せ：042-734-5100(わんりい)



ヨウミンカオラオラオ
莜麵栲栳

【料理講座予告】麻生市民館・料理室での料理の会を下記予定しています。

- ◆5月11日(木) アルジェリア風モロッコインゲンのトマトシチュウとパン作り60年の柚野さんのフランスパン
 - ◆6月15日(木) ジャカルタ出身のロサリタさんのインドネシア料理
- 詳細決まり次第、'わんりい' HP(わんりいで検索可)案内板に掲載します。上記☎にお問合せ歓迎します。

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、古切手と書き損じ葉書を集めています。古切手は周囲を1cmほどを残して切り取り、おついで折に田井にお渡し下さい。

'わんりい' は、毎年4月から新年度になります。

ご継続をよろしくお祈いします。尚、新年度の会費の納入を4月一杯にお祈いします。また、新入会を歓迎します

年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：0180-5-134011 'わんりい' 年度途中からの入会は会費の割引があります。

'わんりい'の名は、'万里'の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催し文化的交流によって国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。

①年10回(2月・8月を除く)おたよりをお送りします。

②'わんりい'の活動の全てに参加できます。

問合せ：042-734-5100(事務局)

◆インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、美しい'わんりい'をPDFカラー版でお送りします。こちらは無料です。

◆町田各所・他で自由に取って頂けます。上記へお問い合わせください。

'わんりい' 222号の主な目次

「寺子屋・四字成語」雑感①毛遂自薦	2
論語断片(25)巻いて之を懐にすべし	3
大連・長春・丹東の旅(その6)	4
混迷の時代を拓くザメンホフの人類人主義(12)	6
東西文明の比較(13)	8
「漢詩の会」報告 ⑩漢詩創作のルール①五言絶句	10
中国の笑い話(31)	12
韓国ハイキング・月出山と珍島の海割れ	13
スリランカ紀行 ⑩私の中のスリランカ・ルーツ	16
丹巴訪問・写真による旅日記 ②	18
わんりい掲示板	22～24

【4月定例会開催日及び4月号おたより発送予定日】

- ◆問合せ：☎042-319-6491(わんりい)
- 4月の定例会：4月11日(火) 13:30～
定例会はどなたでも参加できます。会員の皆さんが顔を合せるチャンスです。
- 5月号おたより発送日：4月30日(木) 10:30～
場所：三輪センター・第三会議室です。
▲おたより発送日はお弁当を持参ください。